

「サバイバーのことばにふれる：質的データの豊かな可能性」

後藤 隆

はじめに

NPO サーベイ公開研究会のコメント機会をいただき、感謝申し上げます。

また、このコメントと定年退官の「最終講義」を兼ねることをお許しいただき、準備等にご尽力くださった皆様、どうもありがとうございました。

ふりかえれば、「サバイバーのナラティブ分析」を、やはり NPO サーベイ公開研究会で発表したのが 2018 年 3 月 24 日でしたから、もう 4 年が過ぎようとしています。

まず、公開研究会テーマ「サバイバーのことばにふれる：質的データの豊かな可能性」へのぼくのコメントの背景に少しふれます。

「サバイバーのナラティブ分析」以来、被爆者調査自由記述回答、『ユキの日記』、『癩患者の告白』を読み返し、またそれらを読み返すために、トラウマ論、ホロコースト研究、オーラルヒストリー学会誌掲載の若い研究者たちの勇気、に学ぶなか、今更ながら「サバイバーのことばにふれる」ことのむずかしさを感じています。それは、ヒトがことばという示差的記号を用いることを避けられないなかで、本来「ことばにならない」過酷な暴力の体験をことばで表現しなければならないことの困難に由来します。

保莉実『ラディカル・オーラル・ヒストリー オーストラリア先住民族アボリジニの歴史実践』岩波現代文庫、2018

今回は、持ち時間のなかで、次のような構成を考えています。

- 1 サバイバーの体験表現における疎のことばについての発見：「ずれてる」
 - 2 サバイバーの体験表現における疎のことばについての発見（理論編）
 - 3 サバイバーの体験表現における疎のことばについての発見（分析編）
 - 4 調査分析者のポジショナリティ：疎のことばの守護者
- +最後の宿題：サバイバーのマルチメディア・データにふれる

1 サバイバーの体験表現における疎のことばについての発見：「ずれてる」

オブライエンの短編小説「勇敢であること」（『本当の戦争の話をしよう』所収）を紹介します。

ベトナム帰還兵ノーマン・バウカーは、僚友カイオワを戦闘で失いました。ノーマンは、迫撃砲が炸裂したソン・チャンポンの泥沼で、僚友カイオワを手探りしたのですが、「カイオワの頭のあるはずのところにはぶくぶくと泡がたっているだけ」でした。

米国の故郷の町に帰ったノーマンは、「ねえ、戦争の話は聞きたくないかい？」と誰かに尋ねようとしますが、「でもその故郷の町にできるのは、見えないふりをして肩をすくめることだけ」でした。

仕方なくノーマンは、日がな一日、シヴォレーで湖の周りの七マイルの舗装道路を何周もして、すごしました。

そのとき、「ずれてる」と感じます。

湖上で停止したモーターボートの男が相変わらずエンジンを相手に悪戦苦闘していた。クイナのつがいが、まるでデコイみたいな恰好で浮かんでいた。水上スキーヤーはよく日焼けして、みるからにスポーツマンという風だった。ハイスクールのバンドはそれぞれの楽器を仕舞っていた。短いズボンをはいた女は、これが最後と我慢強くもう一度針に餌をつけかえていた。ずれてるなと彼は思った。／暑い夏の日、すべてはずれていて、ずっと遠くにあった。

ティム・オブライエン、村上訳『本当の戦争の話をしよう』、文春文庫、2014、第18刷、282頁

原文も引用しておきます。

Out on the lake, the man in the stalled motorboat still fiddled with his engine. The pair of mud hens floated like wooden decoys, and the water-skiers looked tanned and athletic, and the high school band was packing up its instruments, and the woman in pedal pushers patiently rebaited her hook for another try.

Quaint he thought.

A hot summer day and it was all very quaint remote.

Tim O'Brien, *The Things They Carried*, First Mariner Books edition 2009, p140

※『本当の戦争の話をしよう』の原題が「彼らが担ったもの」で、「ずれてる」は quaint の訳であることがわかります。

Quaint can also be used to show that you do not approve of something, especially an opinion, belief, or way of behaving, because it is strange or old-fashioned

<https://dictionary.cambridge.org/ja/dictionary/english/quaint>

読み手が「ずれてる」をこの短編小説のキーワードとして発見できるとしたら、それは「ずれてる」が次のような特徴をもつことばだからです。

「ずれてる」の前後文脈で描かれている、ノーマンのベトナムでの戦闘体験と、ノーマン

にはそれとはかけ離れているように感じられた帰還後の自分以外の故郷の町の人々の言動とのコントラストを、なにかとなにかが「ずれてる」のように用いられる「ずれてる」ということばが表現している

書き出してみると当たり前のようですが、昨今進境著しい自然言語処理の力を借りても、こうした発見は、未だ次のようにするほかありません。

※文章を全文読み込んで、キーワード指定をして、文字列情報処理を行う。

国立国語研究所「ひまわり」。定期更新を含め、ぼくのみるところ、日本語 KWIC プログラム no.1 です。
<https://csd.ninjal.ac.jp/lrc/index.php?%C1%B4%CA%B8%B8%A1%BA%F7%A5%B7%A5%B9%A5%6%A5%E0%A1%D8%A4%D2%A4%DE%A4%EF%A4%EA%A1%D9>

※文章や単語を密なベクトルにして、「ある文脈下でのトークン出現確率（中略）をモデル化する」。

ストックマーク（株）編、近江・金田・森・江間見共著『BERT による自然言語処理入門』2021、第1版第2刷、オーム社、4、11 頁

Google の Colaboratory は、老後の楽しみです。<https://colab.research.google.com/?hl=ja>

落語の例を補足します。「ときそば」という噺の、勘定をごまかそうとする「今なんどきだい？」の落ちで、寄席のお客さんが笑えるのは、「勇敢であること」の「ずれてる」についての発見と同じです。

こうした発見を、「文章や単語を密な dense ベクトルにする」自然言語処理に対して、疎のことば sparse words（「わずかなことば」と訳もある）についての発見、と呼ぶことにしましょう。

次節では、この疎のことばについての発見が、サバイバーの体験表現のことばにふれるには重要であることを、理論的に説明します。

2 サバイバーの体験表現における疎のことばについての発見（理論編）

ホロコースト研究のなかから、2つ紹介します。

ひとつは、ヘイドン・ホワイトによる、フリートレンダーのホロコースト表現（『絶滅の歲月』Saul Friedlander, *The Years of Extermination: Nazi Germany and the Jews, 1939-1945*, HarperCollins, 2007）の読解です。

ホワイトは、カントの「実践」、すなわち「何をなすべきか」の視点からの歴史叙述を「実用的な過去」と呼び、その有力な例として、フリートレンダーのホロコースト表現について、次のような指摘をしています。

……フリートレンダーはあるドラマを構成する一続きの场景の代わりに、一連の「星座的

なイメージ」(中略)を提示する。それぞれの星座はいくつかのパラグラフからなり、それは論証や分析や説明というかたちをとる場合もあるが、概念よりはたんに比喻ないしイメージとして集められた生の「データ」として示される場合もある。これらのデータは、相異なる時代と場所と原典資料から集められたさまざまな項目のソーリーテース (sorites [連鎖体]) あるいは「積み重なり」のように見えるもので、それがもつかもしれない何らかの「信憑性」よりも、起こっていたと信じられていたことの真実を証言している。／フリーレンダーはまた、『絶滅の歳月』への序文で、ホロコーストについての、「信じられない」ようにみえる(そして被害を受けた者たちには「信じられない」ことだった)出来事に直面した場合に生じるにちがいない(ほとんど内臓的 (quasivisceral) な不信の反応)を「知識」がたちまち圧倒し「飼い馴らす」のを阻止するような歴史を書きたい、と語っている。

フリーレンダーのテキストのなかで起こっていることと、そのなかで言われていることを識別しようとするさい、二つのことがらが注目される。／第一に、テキストを中断する日記や手紙から引いた文言、逸話、目撃証言による苦痛、幻滅、絶望の証言——これらはナラティブ化の過程を停止させる。(中略)／第二に、フリーレンダーはこの中断への私たちの応答を彼自身の声が制御することをゆるさない。もろもろの中断は一般化の「見本」や原則の「例示」として提供されているわけではない。それらの内容はしばしば相違しているけれども、ユダヤ人が苦痛のなかで受けた「傷」を典型的に伝える証言の累積ないし集合という効果をもっている。(中略)／フリーレンダーは、(ある種の「声」をもった発話の様式で)語りはするがナラティブ化することのない歴史叙述の新しい可能性をつかんだように思われる。実際、それは語りの対象である出来事や事物を脱ナラティブ化するべく作動している。彼は全知の語り手として声を発することを慎んでいる。また、ストーリーの筋を統制することを放棄し、あちこちで起こったことの記述をおおざっぱな年代記的カテゴリーのもとに蒐集して、自分の耳が聞き目が見るものを信じるわたしたちの能力に挑戦するようなことが起こるのをそのままにしている。

ホワイ、上村監訳『実用的な過去』、岩波書店、2017、49、129-130、137-138 頁

Hayden White, *The Practical Past*, Northwestern Univ.Pr., 2014, p31, 80, 84-85

※なお、概念整理として、ホワイの言う「ナラティブ化」や「ストーリー」について簡単に補足します。それらは、時系列や主述関係などが整序された形で示差的記号を用いること(あるいは用いた結果)、を指します。「サバイバーのナラティブ分析」(2018年3月24日)では、この点野放図に使っていました。今回の公開研究テーマ「サバイバーのことばにふれる」は、みなさんの工夫で修整されています。

cf.プロット、マスター・ナラティブ、ドミナント・ストーリー

ギンズブルグ×ホワイ論争

ソール・フリードレンダー編、上村・小沢・岩崎訳『アウシュヴィッツと表象の限界』、未来社、2013、第3刷 Saul Friedlander ed., *Probing the Limits of Representation: Nazism and the "Final Solution"*, Harvard

もうひとつは、レヴィナスです。レヴィナスは、「他者は現れうるか」を、ホロコースト体験をにらみつつ、ヒトにとってのラディカルな課題として突き詰めた哲学者です。次の引用は、ぼくの実験では、上記ホワイトのフリーレンダー読解のなかの「ある種の「声」をもった発話の様式で」「語りはするがナラティブ化することのない」「叙述の新しい可能性」と呼応する内容となっています。残念ながら、仏語原典を読めたとは言えず、関根の読解に依拠します。

……<語られたこと>の内存在的な意味作用は、動詞の時間的総合と名詞のドクサ的同一化に基づいていた。したがって、<語ること>の脱内存在的な意味作用は、これとは別の仕方、感性的なものの多様性をその多様性を消去することなしに総合する仕方に基づくのでなければならない。この脱内存在的な意味作用における準総合は、レヴィナスの用語では「筋立て *intirigue*」(中略)と呼ばれる。これは劇の筋のようにある時間的展開の中で繰り広げられる特殊な結合原理・総合形式ということを示すための用語である。つまり「筋立て」とは、より一般的な名称でいうなら脱内存在的な意味作用における準総合の形式というべきものであって、隔時性 *diachronie* (隔絶的時間) による総合のことであるといえる。この隔時的総合は共時的に総合を形成することはできず、それゆえ厳密に言うならあるひとつの意識には現れない。脱内存在的な意味作用の構造はこの隔時的総合にその本質がある。厳密な意味ではこの隔時的総合は現象としておのれを与えるわけではないが、といっても何ものでもないもの・無としておのれを与えるというわけではない。この隔時的総合はおのれをあるひとつの現在においては全面的に現れないものとして与える。つまりレヴィナスの用語で言うなら、「回収不可能なもの *l'irrecuperable*」「記憶不可能なもの *l'immemorial*」(中略)であり、あるいはまた「謎 *l'enigme*」「痕跡 *la trace*」(中略)であり、これら準現象とでもいうべきものはどれも、あるひとつの意識、あるひとつの現在には現れないものである。

関根小織『レヴィナスと現れないものの現象学—フッサール・ハイデガー・デリダと共に反して—』晃洋書房、2007、178–179 頁

Emmanuel Levinas, *Le Dit le Dire*, *Le Nouveau Commerce*, no.18/19,1971, pp.19-48

わかりやすさのために、2つの研究を対応させて、整理してみます。

ホワイトの「ナラティブ化」された「ストーリー」は、関根のレヴィナス読解で言えば「動詞の時間的総合と名詞のドクサ的同一化に基づく」<語られたこと>とみてよいでしょう。

ホワイトの「「信じられない」ようにみえる」「出来事に直面した場合に生じるにちがいない」「ほとんど内臓的 (*quasivisceral*) な不信の反応」に基づく「相異なる」「時代」「場所」「原典資料」から「集められた」「さまざまな項目の」「積み重なり」、そして、「ストーリー

の筋」の「統制」「を放棄し」「脱ナラティブ化するべく」「蒐集」された「あちこちに起こったことの記述」は、関根のレヴィナス読解で言えば、「あるひとつの現在においては全面的に現れない」「隔時的総合」（「感性的なものの多様性をその多様性を消去することなしに総合する」）であり、「回収／記憶不可能な」「謎／痕跡」のような「準現象」として現れる＜語ること＞とみてよいと思います。

この整理のなかに、サバイバーの体験表現としてのことばの可能性を読み取ることができます。

ヒトにはことばという示差的記号を用いることが避けられない制約がまわりついていて、ついつい「ナラティブ化」された「ストーリー」や＜語られたこと＞をなぞることを強いられることにもなるのだが、でもそれに終始するわけではなく、「感性的なものの多様性をその多様性を消去することなしに総合する」＜語ること＞、「脱ナラティブ化するべく」「蒐集」された「あちこちに起こったことの記述」、のように、「新しい」表現の可能性があるというのです。

サバイバーにとって、本来ことばにならない過酷な暴力の体験をことばにすることの困難があることはよく知られています。

宮地尚子『環状島＝トラウマの地政学』、みすず書房、2014年、第5刷、「円錐島との比較」、14－18頁

そうした困難のなかで、2つのホロコースト研究が示すように、理論的に、「新しい」表現の可能性があるとすれば、今度は、では、「消去することなしに」「感性的なものの多様性」を＜語ること＞がなされている、「脱ナラティブ化するべく」「あちこちに起こったことの記述」がなされている、のを、どうやって、サバイバーの体験表現のことばにおいて確かめられるか、が課題となります。

次節では分析編としてこの点を扱います。実は、「感性的なものの多様性」を＜語ること＞、「あちこちに起こったことの記述」は、疎のことばについての発見を通じて、確かめられるのです。

3 サバイバーの体験表現における疎のことばについての発見（分析編）

『癩患者の告白』の一部をぼくが分析したものを示します。

内務省衛生局「癩患者の告白」、藤野豊編・解説／編集復刻版『近現代日本ハンセン病問題資料集成＜戦前編＞〔一九一八～一九三一年〕』第2巻、2003、第2刷、不二出版、172-282頁

3-1 『癩患者の告白』：図と地の交替が示唆する病者の翻弄

「渡る世間に鬼はなし」パラグラフは、上記「家の没落」を契機に、告白者にふりかかる様々な出来事が、時系列を追って、「慈悲」や「同情」と「悲しさ」「寂寞」「死」が入れ替わり立ち代わりするように記されていく。すなわち、船中での「天理教の布教師」の「慈悲深き言葉」⇒宿を次々に断られ「家無き自分は益々暗黒の世界に落ち行く様な悲しさと寂寞」

「自分も黙して居ると何處ともなく死ぬ死ぬと悪魔の囁き、前には大きな川があり水田には蛙が罵るが如くに…… 宜し此川へと」⇒宿と掛け合ってくれた「土地の若衆」⇒「線路傳い」の途中「汽車」から逃れ「是程宜い死ぬ機会に遇た僻に尚生を惜むかと自らを笑い又何如にも業病だとも深く感じた」⇒「憲兵巡查」に怪しまれる⇒「或一家の妻の同情」⇒「母」からの「親不孝者奴」⇒水菓子屋の二階の仮寓「営業の妨げ」⇒転居「隠家」⇒「小便大便迄是に経験の無い事をした」⇒「母」の「嫁入り」で一人取り残される⇒「駿河の國の不治の裾野の病院」(復生病院)につながる「修道女」、のようにである。先行する「慈悲」が「地」となって「寂寞」の「図」を浮き立たせ、その「寂寞」が今度は「地」となって「土地の若衆」の親切を浮き立たせる。こうした図と地のコントラストの小刻みな連なりは、標題「渡る世間に鬼はなし」とは異なって、ふりかかる様々な出来事に翻弄される告白者の姿を強く示唆しよう。

後藤隆「『癲患者の告白』を読む-2」『日本社会事業大学研究紀要』第66集、2019、94頁

このように、「天理教の布教師」の「慈悲深き言葉」、「土地の若衆」等々の各々は、疎なことばなのですが、そのひとつひとつについて、単体ではなく、サバイバーのことばのなかに埋め込まれたものとして、その「積み重なり」や図と地のコントラストを発見することによって、前節末尾でふれたサバイバーのことばの「新しい」表現の可能性を確かめることにつながります。

次に、被爆者調査自由記述回答の一部をぼくが分析したものを示します。

日本原水爆被害者団体協議会「原爆被害者調査」、1985年

被爆者調査自由記述回答については、既に「サバイバーのナラティブ分析」(2018年3月24日)で、構文(係り受け)解析を使った分析例を示しました。ただその時の説明は、構文(係り受け)解析の出力結果すなわち「新しい」表現の可能性ととられかねないものでした。その点を修整してあります。

構文(係り受け)解析には、Cabochaを用いた。<https://taku910.github.io/cabocha/>

3-2 被爆者調査自由記述回答：視野の近景から遠景まで「死」

局面①

母方の祖父、祖母、叔母達次々に死亡

↓

火葬

↓

祖父、何人もの人たち

↓

焼けるにしたがって手をのばしていくようになっていました

局面①では、血縁者が「次々に死亡」し「火葬」に付されたこと、なかでも「祖父」が「何人もの人たち」とともに火葬に付された際、「焼けるにしたがって手をのばしていく」様が、まるでズームレンズのように、焦点距離を近づけて、しかもその間中を追うようにとらえられていることがわかる。

局面②

「町の方」から「何人も」「何人も」にげてきた

↓

「家のところ」の「溜池」で「体を洗」う

↓

「翌朝」「1人、2人」「必ず死んで」いる

↓

「大きな穴をほって」「並べて」「土をかけ」「並べて」「土をかけ」「埋め」る

↓

「知り合い」「1人」「名前もしらないまま」「埋め」る

↓

「個人的にたいへん」「ビワの選果場」「救護所」

↓

「顔がまつ黒になって、くちびるがめくれてはれあがった女の人、ぼろぼろになった人たちが何人もきました。」

局面②では、「町の方から」「にげてき」た「何人も」「何人も」が朝を迎えるごとに「必ず」「死」に、その遺体の多くを「大きな穴」に「並べて」は「土をかけ」るを繰り返して「名前も知らないまま」埋葬したこと、さらに本来収穫の場所であった「ビワの選果場」をにわか「救護所」にせざるをえず、そこに「真っ黒」な「顔」、「くちびる」の「めくれ」「はれあがった」「女の人」「ぼろぼろになった人たちが」「何人」もきたことが記されている。埋葬の際の「知り合い」の「1人」、「くちびる」の「めくれ」「はれあがった」「女の人」への焦点距離の移動がみられる。

局面③

「倒れた塀の下敷きになった女の人が、はいだしてのがれようとして 道路に爪をたててい」たが、「その指の爪はなくなって、第2関節のところまでなくなって、爪をたてたまま死んでいました」

↓

「大川のところでは、にげていく人たちがつぎつぎに川にとびこみ、橋の下には人間の

山のようなものができていました」

局面③では、「倒れた塀の下敷きになった女の人」→「はいだ」す→「道路に爪をたててい」と焦点距離の移動がみられる。その後の描写「指の爪はなくなって」の後の「第2関節のところまでなくなって」が指の爪がなくなったうえにその指の第2関節までなくなったのか、また「爪をたてたまま死んでいた」の「爪」は、最初に道路に爪をたてた指（その爪はなくなっているのだから）ではなくほかの指の「爪」なのか、はわからない。しかし、焦点距離を移動し、最初に「道路に爪をたて」たところから「爪をたてたまま死んでいました」までの間を記していることは明らかであり、その間中、回答者はその「女の人」の指先を凝視していたのである。そして、回答者はこの凝視から焦点距離を移動し、今度は、ワイドに、「つぎつぎに」「とびこ」んだ人たちが「山のようなもの」を形作る間を、とらえているのである。

この分析例からは、局面①～③ごとの、自由記述回答の構文（係り受け）解析、すなわち日本語文法則と電子辞書を用いたプログラム出力結果を手がかりに、疎のことばひとつひとつを拾っていくと、火葬に付されながら「のぼしていく」ようにみえた祖父の「手」、「選果場」の「知り合い」の「めくれ」「はれあがった」「くちびる」、「塀の下敷きになった女人」の「道路にたてた爪」、「橋の下」の「人間の山のようなもの」のように、回答者にとってこの场景の体験が、焦点距離の移動に伴って視野の近景から遠景まで「死」の「積み重なり」であったことが強く示唆されます。疎のことばについて、それを、局面①～③の展開や前後の文脈のなかに埋め込まれたものとして発見することによって、単体とはレベルを異にする、サバイバーのことばの「新しい」可能性を確かめることにつながるのです。

4 調査分析者のポジショナリティ：疎のことばの守護者

+最後の宿題：サバイバーのマルチメディア・データにふれる

前節の分析例のように、疎のことばについての発見を通じてサバイバーのことばの「新しい」可能性を確かめることができるとして、締めくくりに、あらためて調査分析者のポジショナリティについて考えておきたいと思います。

サバイバーのことばにふれるでは、＜語ること＞が可能なサバイバーの調査台帳があって、そこからサンプリングすることは現実的ではないので、無作為割付ではない少数ケースの観察研究にならざるをえません。つまり、処置の効果を明らかにする実験研究のようなアウトプットを直接期待できないのです。くわえて、サバイバーのことばは、数値化されていない「質的」データです。

※「質的」データ分析から実験研究に、採り上げるべき変数を送り込むなど、「質的」データ分析と「量的」データ分析には相補性があります。また、今回の守備範囲を越えますが、「量的」データ分析において、「注意深く制御された、無作為に割り付けられていないデー

タを以て因果効果を評価することは、合理的である」とする考え方が、認められてきています。Donald B. Rubin, Estimating, Causal Effects of Treatments in Randomized and Nonrandomized Studies, *Journal of Educational Psychology*, 1974, vol.66 no.5, p688

調査分析者として、本来ことばにならない過酷な暴力の体験をことばにする困難のなかで、「新しい」表現に挑んでくださったサバイバーの方に、なにかもっとはっきりしたものをお返しできないか、と思うのは当然です。

ぼくも長いこと、どこかでそう思っていました。

ですが、サバイバーのことばにふれることを続けていく内に、ささやかながらできることもあるのではないかと考えるようになりました。その補助線を、守のアドルノ読解から引用しておきます。

先取的に決定された実践の内容から除去されるべき痛みを探す、という転倒は、抵抗され告発されるべき悪いものを欲するという歪んだ欲望を生じさせる。

守博紀『その場に居合わせる思考：言語と道徳をめぐるアドルノ』、法政大学出版局、2020、初版第1刷、375、注(207)

「歪んだ欲望」までいくと、ミュンヒハウゼン症候群になってしまいます。フランクフルト学派の社会理論+精神分析の面目躍如ですが、その前の「先取的に決定された実践の内容から除去されるべき痛みを探す、という転倒」までにしましょう。

ここでの「転倒」とは、サバイバーになんらか聴取なりをして、そのいずれかと、既に用意された支援メニュー／リソース、すなわち「先取的に決定された実践の内容」とを引き合わせることで、「除去されるべき痛み」はわかったことにする、ということです。つまり、論理的には、聴取しようがしまいが、支援メニュー／リストを以て「除去されるべき痛み」なのですから、聴取はアリバイであり、サバイバーのことばはなかったことにされかねません。

ふりかえれば、しかも、サバイバーのことばは、ひとつひとつ拾って行ってこそ発見につながる、裏返せば発見されにくい、つまりもともとなかったことにされかねない、疎のことばでした。

サバイバーのことばにふれる調査分析者のポジショナリティは、こうした疎のことばを、「転倒」の拙速を牽制しつつ、守護する者なのだと、ぼくは今そう考えています。

「効果」を直接期待せず、支援メニュー／リソースとも距離をとる。この守護者というポジショナリティの suspense は、心に波を立てることもあるかもしれません。そういう時、散歩して暖かいものでも飲んで、思い出してほしいのです。

ことばにならない体験をことばにする困難に挑むヒトならではの「新しい」表現が、これまでもこれからも、あなたの発見を待って、ひっそりとしかし確かに在る。

学部生にも院生にも話してきたことです。

※守護者という表現は、お茶の水のニコライ堂で、父を見送ったときのロシア正教のパニヒダ panikhida の祈りの一節、「汝の戒めを我に伝え賜え」をヒントにしたものです。

若い方々に宿題をひとつ残します。

『アノニマスケイプ』という写真集があります。1899 年～2020 年までの、日本の行旅死亡人の官報掲載記事、そしてその発見場所をあらためて撮影したモノクロ・スナップを、見開きの左右いずれか、に配してあります。

『アノニマスケイプ』を、「勇敢であること」と対応させれば、ベトナムでの戦闘描写が官報掲載記事に、「ずれてる」の一言がモノクロ・スナップになるのでしょうか。もちろん、モノクロ・スナップには、一言もないわけですから、ことばとしては無に近い疎です。でも、読者としては、官報掲載記事の行旅死亡人に関するプロフィールのちょっとした具体、例えば「白色のパンツ」と、なんの変哲もない松並木のモノクロ・スナップとのコントラストを、「匿名の場景」に近づく手がかりにするのだと思います。

細川文昌『アノニマスケイプ』平成寫真文庫、2020

※モノクロ・スナップは、ぼくには、ピントのはっきりしない、いわゆる「建売写真」のようにみえます。藤原新也の事件現場写真を思い出しました。

ぼくは、サバイバーのことばにふれる、で精いっぱいでした。

『アノニマスケイプ』のようなマルチメディア・データについては、若い方々の出番です。

いずれ、関連研究を蓄積され、公開研究会「サバイバーのマルチメディア・データにふれる」の実現につなげていただけますこと、教員稼業三十有余年最後の宿題です。ご検討賜れば幸甚です。

これで、ぼくの公開研究会コメント／最終講義を終わります。

年度末の祝日の貴重なお時間を割いていただき、あらためて感謝申し上げます。

ありがとうございました。